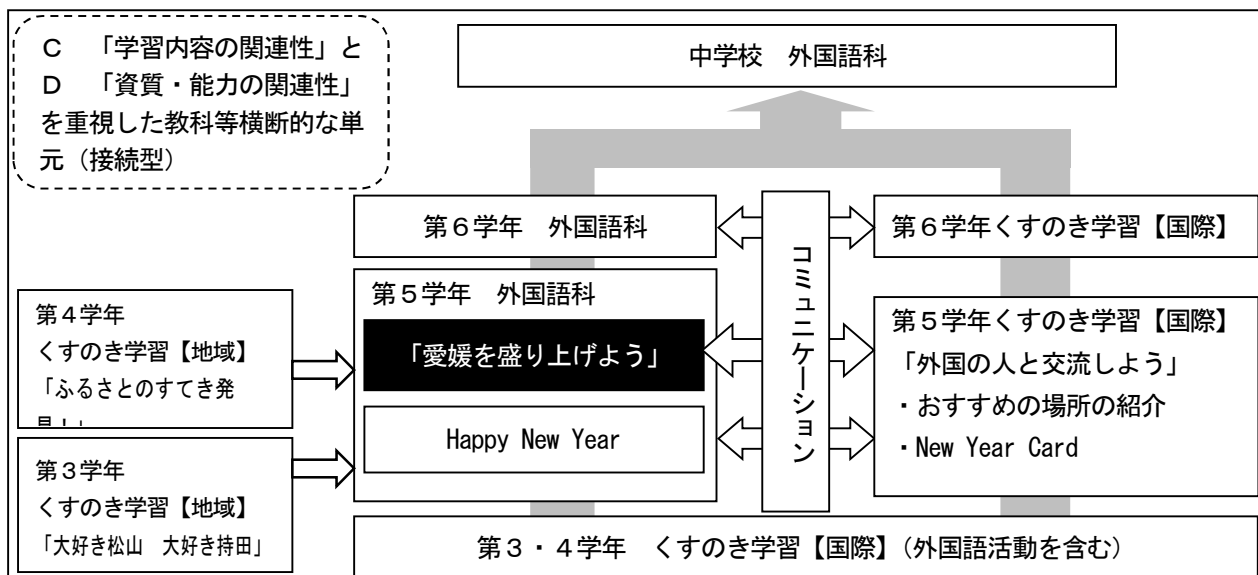


【実践事例】

第5学年 愛媛を盛り上げよう 外国語科（＋くすのき学習【国際】【地域】）

【単元全体構想について】



本単元は、C「学習内容の関連性」とD「資質・能力の関連性」を重視した教科等横断的な単元である。

前単元「What would you like? ランチメニューを考えよう」では、特別な人にランチメニューを作り、その紹介を行った。ただその人のことを考えながら自分でメニューを考えるのではなく、実際にその人にどんな食べ物が好きか尋ねたり、レストランで店員と客との注文の場面を設定したりするなど、他者とのやり取りを大切にした単元を構成した。子どもたちからは、ランチメニューを作りながら、友達とのかかわりを楽しむことができたという前向きな感想が多く見られた。しかし、必要以上の食べ物カードを集めてしまい、ランチメニューを仕上げる際に、使わなかった食べ物が出たり、店員と客のやり取りから、店でのやり取りは楽しいとだけ感じたりする子どももいた。そこで、社会科の食料生産やコロナ渦における飲食店の状況などに触れながら、食料を大切にする気持ちを高めたり働くことの大変さについて考えさせたりした。さらに、新型コロナウイルスの影響は飲食店だけでなく、愛媛県を訪れる人の減少にもつながっていることから、子どもたちは、「松山や愛媛県に興味を持ってもらいたい。」「またたくさんの人に松山に来てもらいたい。」という思いが高まっているため、本単元を以下のように設定した。

本単元では、自分たちが住んでいる都道府県や地域には名産品や名所があることに目を向けさせ、自分たちのお気に入りのものやことについて、簡単な英語で紹介することをねらいとしている。その紹介を学級内の紹介に終わらせるのではなく、くすのき学習【国際】の時間を用いて、実際に外国の人（オーストラリアの友達）に向けて行うことで、英語を用いて紹介する必然性が生まれる。さらに、松山や愛媛県について知らない人に、分かるように伝えるにはどうすればいいか考えるなど、相手意識を持つことのできる単元である。そして、外国語科で学んだ英語を用いてコミュニケーションを行い、自分たちの英語が伝わったと実感することで、これからもいろいろな人とコミュニケーションを図っていきたいという気持ちを高めることができる。と考える。

まず、「出合い」の場面では、前単元の紹介の表現「This is ～.」を用いた教師の「自分の町しょうかい」を聞く。名産品や名所の名前を言っただけでは、一体それがどのようなものか相手に伝えることができないことに気付かせ、大きな数や様子を表す表現を用いて詳しく説明する言い方を知るなど、単元を通して伝える相手を意識した活動となるようにする。

「追究」の場面では、まず、紹介や詳しく説明する言い方を聞いたり友達に話したりするなど、慣れ親しむ時間を確保する。そして、第3・4学年のくすのき学習【地域】の学習を思い出しながら、紹介したい内容について考える。紹介する内容でグループ分けを行い、子どもたちが協働しながら学習を進められるようにする。

「自分の町しょうかい」を交流する場面では、グループを離れいろいろな友達と紹介し合い、助言をもらえるようにする。相手に分かるように紹介するための内容やコミュニケーションに関することなど、話し合う内容を明確にすることで、助言をしやすくする。それを全体場で共有し、解決に向けて話し合わせたりするなど、主体的・対話的な活動となるよう促す。友達と協力しながら「自分の町しょうかい」を完成させることで、オーストラリアの友達との交流への意欲を高め、くすのき学習【国際】での「自分の町しょうかい」に臨ませる。

「振り返り」の場面では、くすのき学習【国際】での「自分の町しょうかい」を振り返り、外国語（英語）を用いて、うまくかかわれたところや上手にできなかったところについて話し合う。その上で、うまくかかわれた会話について、全体で練習をする。そのことにより、これからも外国の人とコミュニケーションを図っていきたいという気持ちが高まると考えた。

【単元のねらい】

- 名産品やお気に入りの場所、「自分の町しょうかい」の言い方を理解し、「自分の町しょうかい」を言ったり聞いたりすることができる。
- 詳しく伝えたり自分の思いを付け加えたりしながら、「自分の町しょうかい」をすることができる。
- 他者に配慮しながら、「自分の町しょうかい」をしようとする。

【単元の展開】（全7時間）

場 面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時 間
出 合 い	「自分の町しょうかい」はどのようにすればいいだろう。 ○ 教師の話聞き、「自分の町しょうかい」の仕方を知る。 ○ 「自分の町」について詳しく紹介する言い方を知る。	● 「自分の町しょうかい」に関心を持ち、紹介したいという意欲が高まっている。 ● 相手に分かりやすく伝える言い方を理解している。	2
追 究	「自分の町しょうかい」の言い方に慣れよう。 ○ 紹介する表現や詳しく言う表現を聞いたり言ったりして、その表現に親しむ。 くすのき学習【国際】 紹介するものを決めよう。 「自分の町しょうかい」を行う準備をする。 ○ 友達と協力し、「自分の町しょうかい」を考える。 ○ 他のグループと交流し、よりよい紹介となるように助言をし、それを基に紹介の練習をする。	● 「自分の町しょうかい」を聞いたり言ったりして、その表現を理解している。 ● 紹介の表現を用いたり、詳しく説明する表現を用いたりして、「自分の町しょうかい」を考えている。 ● 友達からのアドバイスを基に、相手に伝わるように、「自分の町しょうかい」を見直し、紹介している。	4
振 り 返 り	「自分の町しょうかい」をし、活動を振り返ろう。 くすのき学習【国際】 「自分の町しょうかい」をしよう。 ○ 外国の人とうまくかかわれた英語表現を振り返り、全体で練習し、次の交流に生かす。	● 「自分の町しょうかい」を振り返り、これからの交流に生かしたいという気持ちが高まっている。	1

【単元の実際】

「出会い」の場面

（第1時）

- 前単元「What would you like? ランチメニューを考えよう」でのランチメニューの紹介を思い出させ、その方法を用いて教師のお気に入りの場所について紹介した。すると、子どもたちからは、「お気に入りの場所がどこかは分かったが、なぜそこがお気に入りの場所なのか分からない。」という意見が出てきた。再度、教師がそこでの有名なことや詳しく伝える言い方を用いて、お気に入りの場所を紹介し、本単元のゴールを示した。また、くすのき学習【国際】の時間に、インターネットの会議システムを用いて交流を行っているオーストラリアの友達に松山（愛媛）について紹介する活動を取り入れることで、子どもたちの自分たちの町を紹介したいという意欲化を図るとともに、単元を通して目的意識・相手意識を持って学

習に臨めるようにした。

- 教師の日本の有名なものを紹介を聞いたり、子どもたちが自分の知っている有名なものを紹介し合ったりすることで、“**It’s famous for ～.**”という表現に親しませた。

(第2時)

- 前時の有名なものを紹介する言い方“**It’s famous for ～.**”を用いて、日本の名所や名産品の紹介を聞かせ、その表現のインプットを図る。その後、この表現でお気に入りの場所を紹介することができるかと子どもたちに聞くと、「どう有名なのかが分からない。」「どう有名なのかを伝えたい。」という反応が返ってきたため、大きな数の仕組みや様子を表す言葉（形容詞）について学習をし、詳しく説明する言い方を確認した。この1時間だけでは定着を図れないため、今後の学習において復習を継続した。

「追究」の場面

(第3時)

- 有名なものを紹介する言い方や、大きな数、様子を表す言葉（形容詞）を用いた3ヒントクイズを行い、繰り返し言ったり聞いたりすることで、その言い方に慣れ親しませた。また、教師のお気に入りのものを聞き、紹介の仕方を振り返るとともに、ただ紹介するだけでなく、既習の表現(**I like ～. You can ～.**)を用いて自分の思いを伝えることで、聞き手を納得させることができることを押さえた。

(第4時)

- くすのき学習【国際】の時間に、第3・4学年のくすのき学習【地域】の学習を振り返りながら自分が紹介するものを決めた。自分が調べたことには思い入れがある場合が多く、自分の思いを持って紹介したいことを考えることができた。また、「道後温泉」「みかん」「食べ物」など、紹介する内容によりグループを決めた。グループの中で、似たような英語表現を使用するようになるため、紹介例を基に教え合いながら紹介原稿を考えるなど、協働して学習を進めることができた。
- 原稿ができた子どもから、実際にALTに紹介をさせた。ALTには英語の読み方を確認してもらうとともに、オーストラリアの子どもの立場で聞いてもらい、日本のものはそのままでは伝わらないことを子どもたちに気付かせた。相手意識を持って、原稿を再考する必要性について考えさせた（資料1）。



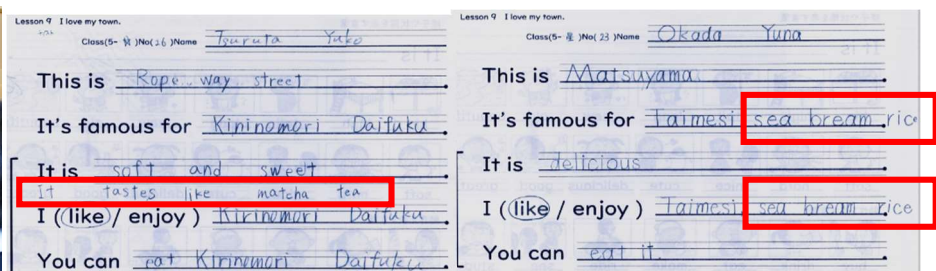
資料1 ALTとの練習

(第5時)

- 前時の学習を振り返らせ、オーストラリアの友達に伝わるように紹介原稿について見直しを行った。まず、別のグループの子どもに紹介し合い、それが伝わるか確認を行った。そして、どのように直せばよいかアドバイスをし合った。紹介は英語で行うが、アドバイスは日本語で行うことで、自分の思いをしっかりと伝えられるようにした。その後、グループに戻り、アドバイスを基に紹介原稿を再考した（資料2）。日本の言葉は英語に直したり、詳しく説明を入れたりした（資料3）。子どもたちからは、「自分たちには当たり前のことでも、それが伝わらないことがある。」「オーストラリアの友達に伝わるように、紹介を直すことができた。」と相手の立場に立って紹介を再考することができた。



資料2 グループ活動



資料3 紹介原稿

(第6時)

- 紹介の仕方に視点を当てて、紹介の練習を行った。事前に気を付けるポイントを子どもたちに聞くと、「スマイル」「ジェスチャー」「アイコンタクト」「クリアーボイス」などの話し方だけでなく、「聞いてい

る様子を見て、伝わっているか考える」と、この活動においても聞き手のことを考えて練習を行う姿が見られた。紹介の様子を客観的に見られるように、自分たちの紹介の様子をポータブルPCで撮影し、紹介の様子を見返したり、映像を基にALTからアドバイスをももらったりして、自分たちの紹介に生かした(資料4)。子どもの振り返りには、「タブレットPCで撮影したので、アイコンタクトができていないことが分かった。気を付けたい。」「グループの友達に教えてもらって、話し方を改善できたのでよかった。」「練習がしっかりできたので、オーストラリアの友達との交流が楽しみだ。」と相手意識を持ちながら練習に取り組み、紹介に向けての自信を深めることができた。



資料4 練習の様子

「振り返り」の場面

(くすのき学習【国際】での交流活動)

- 交流の最初は、緊張を感じさせたが、オーストラリアの子どもたちが頷いたり相づちを返したりしながら聞いてくれたことに安心をして、だんだん練習の通りに話せる子どもが増えてきた(資料5)。子どもたちの中には、ただ原稿を話すだけでなく、相手の表情を見ながら理解度をチェックし、ジェスチャーを入れるなど、相手の立場に立って紹介をすることができた子どもも多くいた。交流の振り返りには、「紹介してくれたことに質問をしてくれてうれしかった。」「オーストラリアの友達に分かるように、ゆっくり笑顔で話せてよかった。」「また、交流をしたい。」という達成感から、次の交流への期待感を膨らませることができた。



資料5 交流の様子

(第7時)

- 交流を基に、再度子どもたち同士で紹介し合った。練習の段階では、一方的に感じた紹介も、交流の後では、顔を上げて相手の方を見ようとしたり、相手の表情をうかがったりする姿が見られるようになってきた。また、上手にオーストラリアの子どものに伝えられたと感じた子どもは、自信を持って紹介に臨んでいた。反対に上手に伝えられなかったと感じていた子どもは、友達の様子を見たり、自分で交流の様子を振り返ったりして、次の交流で気を付けることを考えるなど、今回の交流を前向きに捉えており、どの子どもも次の交流を楽しみにしていた。

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- ただ紹介を行うだけでなく、実際にオーストラリアの子どものに伝える活動を設定することで、目的意識・相手意識を持った活動となった。
 - 「オーストラリアの子どものに伝わるように」と意識付けることで、紹介原稿を作ったり、コミュニケーションのとり方について考えたりする際に、協働して学習に取り組むことができた。
 - 話すこと[発表]領域であったため、交流のときに十分にやり取りを引き出すことが難しかった。学期に1度、どの単元で交流を図れるかを予め考えておく必要がある。
 - どの子どもも交流に参加できるように、話形を固定しすぎたため、子どもたちの自由なやり取りが生まれにくかった。自由に話せる部分とそうでない部分をはっきりさせる必要がある。
- ☆ 外国語科で目的に合わせて交流に必要な英語を身に付け、それを生かして交流ができる場をくすのき学習【国際】で設定するようにするツーステージ型で設定することで、積極的なやり取りを生み出せるのではないかと考える。